

Ⅱ. 調査結果の要約

23年調査のトピックス

1

犬の飼育頭数と飼育意向が減少

- 犬の飼育頭数は約20万頭の減少、新規飼育意向率も微減が続く。
- 猫の飼育頭数は横ばい。但し新規飼育頭数の減少が、近年続いている。

2

生体入手価格の上昇

- 犬、猫ともに有償の購入率が増加し、生体入手価格の平均も上がっている。
- 特に有償入手先では、ペットショップからの入手が増えている。

3

“子どものために”飼い始める人の増加

- 犬の新規飼育者層は、ファミリー層が多い。子どもの遊び相手目的で飼育し始める人が増加。犬を飼うことで、子供の情緒面にも、良い影響がみられた。
- 一方で、“自身の癒し”“寂しさの解消”などの動機が減少。

4

シニア向け飼育支援サービスの浸透に課題

- ペットを飼育することで、主に情緒面の良化や運動量の増加といった良い影響がある。
- 一方で、シニアの飼育支援サービスの認知が低い。

調査結果のまとめ

【犬の飼育頭数と飼育意向が減少】

現在飼育率、平均飼育頭数、飼育頭数、飼育意向 ……P18-28

- ・犬は、飼育頭数、飼育率は昨年から減少。新規頭数も今年は若干減。飼育率・新規の飼育意向率の低下が続いている。
- ・猫は、飼育頭数・飼育率、新規飼育意向率が横ばいで推移。ただし新規飼育頭数が今年も低下。

【生体入手価格の上昇】

生体入手価格 ……P44-49

- ・犬は、飼育1年以内飼育開始者における無償入手の割合が低い。主にペットショップでの購入が増えている。また、近年飼育開始者ほど入手時の平均価格も高く出ている。
- ・猫も、飼育開始時期が短いほど、無償入手の割合が低い。野良猫経由が減り、ペットショップでの購入が増えている。平均価格は、3年以内飼育開始者と比べて、1年以内飼育開始者の方が、高い。

【“子どものために”飼い始める人の増加】

1年以内飼育開始者の傾向 ……P50-55

- ・犬、猫に共通する傾向として、1年以内飼育開始者は20-30代や小学生までの子供との同居者が多い。犬を飼うことで、子供に対し、「他の動物への興味」「表情が明るくなった」「家族との会話量が増えた」といった効用が確認された。
- ・飼育の動機も犬は「子供の遊び相手が欲しい」が、相対的に高く、「日々の生活に安らぎが欲しい」が低い。

【シニア向け飼育支援サービスの浸透に課題】

シニアの飼育支援について ……P56-61

- ・ペットを飼育することで、表情の変化、会話量の変化等の良い影響が、家族目線でも確認できている。犬の場合、飼育者本人の自覚として「運動量が増えた」も高い。
- ・一方でシニア飼育支援の一助となる各種サービスは認知・利用経験ともに低く、特にシニアにおいて低い結果となった。